第39回
宮前フィルハーモニー交響楽団
定期演奏会

2015年6月7日(日) 13:30開場 14:00開演
宮前市民館大ホール

指揮:田中一嘉

チェロ独奏:ベアンテ・ボーマン
元東京交響楽団首席チェロ奏者

管弦楽:宮前フィルハーモニー交響楽団

ワーグナー／歌劇「リエンツィ」序曲
エルガー／チェロ協奏曲
ブラームス／交響曲第4番

後援 川崎市　川崎市教育委員会　「音楽のまち・かわさき」推進協議会
協賛 川崎信用金庫

演 目

ヴィルヘルム・リヒャルト・ワーグナー
歌劇「リエンツィ」序曲

エドワード・エルガー
チェロ協奏曲

ヨハネス・ブラームス
交響曲第4番

指揮：田中一嘉
チェロ独奏：ベアンテ・ボーマン
管弦楽：宮前フィルハーモニー交響楽団

田中 一嘉 *Tanaka Kazuyoshi*

東京生まれ。桐朋学園大学音楽学部卒業。指揮を故斎藤秀雄、小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明の各氏に師事。コントラバスを江口朝彦、堤俊作の両氏に師事する。在学中より同大オーケストラ定期演奏会、オペラ公演等を指揮し、故斎藤秀雄、森正、秋山和慶の各氏、及び、ブローダス・アール氏、河野俊達氏、フランコ・フェラーラ氏らの指導を受ける。学外では、日本オペラ協会、長門美保歌劇団、東京アカデミー合唱団指揮者として、数多くのオペラ、特に宗教音楽分野での実績を積む。1976年、大学在学中に、第4回民音指揮者コンクール（現、東京国際音楽コンクール〈指揮〉）入選。奨励賞受賞。卒業後、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮者、群馬交響楽団指揮者を歴任。これまでに東京交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、札幌交響楽団、九州交響楽団、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉、オーケストラ・アンサンブル金沢等、日本の主要オーケストラを指揮する。1992年には、ヤナーチェク春の国際音楽祭（チェコ・オストラヴァ）にてヨーロッパデビュー。1995年には、カルロビ・ヴァリ交響楽団を指揮。2000年、ドイツ・ロットヴァイル夏の音楽祭、2001年、ベルリン日本週間での公演、2003年、ウィーン・ムジークフェラインザールでの日墺合同第九演奏会等、その活動は多岐に及んでいる。昭和音楽大学講師。

ヴィルヘルム・リヒャルト・ワーグナー
歌劇「リエンツィ」序曲

歌劇「リエンツィ」

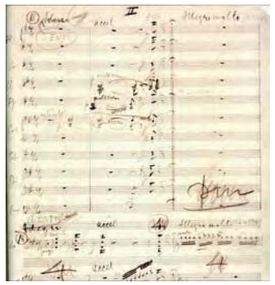
リエンツィの初演は、オペラ史上、最も大きな成功を収めたものの一つといえるでしょう。

23歳のワーグナーは、イギリスの小説家エドワード・G.ブルワー＝リットンの歴史小説「リエンツィ」を読み、数か月後にこの台本を作り上げています。

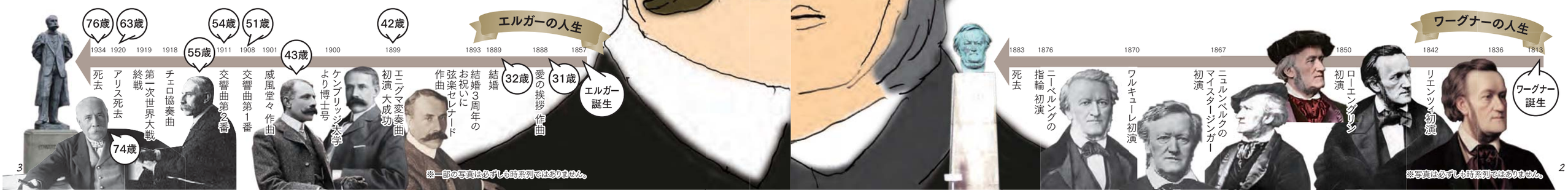
舞台はローマ。公証人リエンツィは、貴族たちの暴政に不満をもっていた民衆から請われて、指導者となり、民衆と力を合わせて貴族に抵抗。暴政を解放します。救済者として歓迎され、護民官の地位に就きます。しかし、ローマの皇帝が変わり、新しい皇帝は教皇と結託してリエンツィを弾圧。民衆も、誤解からリエンツィに反感を抱くようになり、ついに彼に対し暴動を起こすのです。自身が解放したいと思っていた民衆の手によって殺されてしまうリエンツィの物語です。

名指揮者ワーグナー

彼は名指揮者でもありました。当時、演奏不可能と言われ、ことごとく失敗に終わってきたベートーヴェンの第九を、ワーグナーは自分の指揮する演奏会のプログラムに加え、大成功を収めました。彼の指揮による演奏があって、今の第九があるのです。



チェロ協奏曲の自筆譜



※一部の写真は必ずしも時系列ではありません。

※写真は必ずしも時系列ではありません。

チェロ独奏
ベアンテ・ボーマン
Berndt Bohman
元東京交響楽団首席チェロ奏者

スウェーデンのファルン市で生まれ、12歳の時チェロを始める。1967ー71年、ストックホルム王立音楽大学でグスタフ・グレンダール教授に師事、最優秀賞の殊勲メダルを授与され卒業し1971ー1972年スウェーデンのゴッテンブルグ市（スウェーデン語ではイエーテボリ市）の国立歌劇場の首席チェロ奏者を務める。海外派遣留学生、及び、西ドイツ給費留学生として1972ー1975年まで国立フォルクヴァンク芸術大学マスタークラスにてポール・トルトリエ教授に師事する。最終的にフィンランド政府給費留学生としてシベリウス・アカデミーのマスタークラスにてアルト・ノラス教授に師事し1979年首席で卒業する。1980年から2011年3月までの31年間、東京交響楽団の首席チェロ奏者を務め退職、現在は玉川大学芸術学部の非常勤講師、客演首席チェロ奏者として、室内楽などの演奏活動やチャペルコンサートをはじめとする宣教の働きにも携わっている。

フィンランドのヘルシンキ市のラマト・プフ聖書学校で聖書の学びも修め、1992年にはカリフォルニア神学大学院より名誉神学博士号を受ける。2003年9月に公募部門で全日本山岳写真協会賞を授与され、全日本山岳写真協会の会員となる。その後も数々の賞を受賞している。

エドワード・エルガー
チェロ協奏曲

1898ー1919年、（エルガー41ー62歳）は、作曲家エルガーの最盛期でした。そして、この期間の最後に生まれたのがチェロ協奏曲です。第一次世界大戦終戦の年でもあります。

ここで、本日チェロ独奏を演奏していただくボーマン先生に、曲について教えていただきました。

エルガーとチェロコンチェルト

エドワード・エルガー（1857ー1934）は、ウースターの教会のオルガニストに、父親の後任として1885年に就任しました。しかし、その4年後には作曲に専念するために辞めています。

エルガーは、第一次世界大戦（1914ー1918）が引き起こした苦しみに愕然とし、失意に暮れました。戦争で亡くなった1000万人の兵士のうち、90万人がイギリス兵でした。戦争の終わりごろ、エルガーは体調を崩し、妻と一緒に東イギリスのサセックスのフィトルワース近くの「ブリンクウェルズ」と称する家へ移り住みます。

夜にフランスの大砲の音が海峡を越えて飛んでくるのが聞こえました。

エルガーは1917年の手紙にこう書いています。「全ての良いもの、美しいもの、新しいもの、清新なものは私から離れてしまった。そして二度と戻らないだろう。」エルガーは戦時中はほとんど作曲はしませんでした。「こんなに暗い影が我々を覆っている時にどうやって真の仕事ができよう。」

1918年、エルガーは感染した扁桃腺の除去手術をロンドンでうけます。鎮痛剤から意識が戻ると、紙と鉛筆を求め、チェロ協奏曲の最初のテーマとなるメロディーを書き留めました。1918年の終わりに、エルガーの妻は日記に「素晴らしい新しい音楽。戦争のシンフォニーにふさわしく、純粋な木管楽器の音に嘆きが満ちています。」と書いています。

この協奏曲の冒頭は、チェロの重音から突然始まります。まるで無意味な戦争に反対しているかのように怒りに満ちています。エルガーが病床で書いたテーマは、第1楽章で4回でてきます。この哀愁に満ちたメロディーは、戦争で失われたものに対するエルガーの嘆きを表しています。

エルガーは、人生の意味を見出そうとする人のイメージを音楽的に表現したかったと言っています。

曲は、ワーグナーやシューマン、ブラームスの影響を受けていると言われています。

4楽章から成りますが、1楽章と2楽章は続けて演奏されます。第一次世界大戦という時代にも思いを馳せながら、作曲家渾身の傑作をお聴きください。

知っているようで知らないエルガー

エルガーといえば、「威風堂々」。本場イギリスでは、第二の国歌として親しまれている曲です。しかし、それ以外に知っていることは、実はあまりないのではないでしょうか。

家族

父は楽器店を経営しながら、教会のオルガニストを務めていました。父の影響で、彼も音楽に目覚めますが、経済的な事情から、独学で勉強。16歳でヴァイオリン教師となりました。

愛妻家

エルガーは愛妻家でした。妻はピアノの教え子であったキャロライン・アリス・ロバーツ。8歳年上の彼女は、生涯を通じて彼を献身的に支え続けました。彼女の支えがなければ、エルガーの成功はなかったと言えるでしょう。

第一次世界大戦が終わった翌年、チェロ協奏曲初演の二年後に、最愛の妻は肺がんのため、72歳で息を引き取ります。そのため傑作は、この曲を最後に生まれることはありませんでした。妻に先立たれて以降、彼の創作への意欲は薄れてゆくのです。

愛の挨拶

威風堂々の次に有名なのは、「愛の挨拶」でしょう。これはエルガーが婚約に際してアリスに贈りました。アリスは、自作の詩を贈っています。

彼の代表作を少しご紹介します。

14人の人びと。「エニグマ変奏曲」

エニグマとは、ギリシャ語で「謎」。曲は、14曲のバリエーションからなり、それぞれテーマとなる人がいます。サブタイトルとして、そのイニシャルや愛称がつけられ、性格や話し声、演奏の特徴などを音楽にしています。

たとえば第1変奏サブのタイトルは、"C.A.E."。妻キャロライン・アリス・エルガーのイニシャルです。

また、演奏機会の多い第9変奏は、"Nimrod"。親友アウグスト・イェーガーの愛称が「ニムロッド」です。彼は、エルガーがスランプのときに、ベートーヴェンのピアノソナタ第8番「悲愴」を聴かせ、難聴でも音楽を生み出した作曲家を引き合いに励ましました。そのため、第9変奏には悲愴のエッセンスが取り入れられています。

最後の第14変奏のサブタイトルは"E.D.U."。愛妻アリスがエルガーにつけた愛称が「エドゥー Edu」。彼自身です。

ブラームスの「交響曲第5番」

エルガーの交響曲第1番は、ベルリン・フィルの常任指揮者であったアルトゥール・ニキシュによって、「ブラームスの交響曲第5番」と称されました。

ブラームスの交響曲は4番まで。それに続く5番目に値するという、これ以上にない最高の評価でしょう。

第4番の魅力とは

この曲は、聴く人を得も言わぬ感情にさせます。聴き手をそんな気持ちにさせてしまう4番の魅力とは何でしょう。

以下、引用します。

この曲の「その古めかしさは、人間に永遠につづく過去への追憶としてすべての人に共感される。…そのさびしさは、ブラームスのものであると同時に人間全体のものであり、ことに、多少とも人生の苦しみをあじわった者には、心からのなぐさめである。ベートーヴェン的な闘争や憧憬や理想も人生への光であるが、ブラームス的な諦観は、それ以上に身近な言葉である」。

（『名曲解説全集2』より引用）

冒頭から心をわしづかみにされる、もの悲しい曲に、はっきりこれと見えない何かを呼び起こされます。

1楽章 うら寂しい秋のような憂愁の溜息と情熱。

堰を切ったように流れ出す弦楽器の憂いを帯びたメロディーが、一瞬にして曲の情景をつくり出します。ときに溜息のようにも悲しく、ときに熱を帯びる曲の表情を感じてみてください。

2楽章 巡礼のように。粛々と。

冒頭は、ホルンと木管楽器による無伴奏の序奏。やはり何か寂しさを感じさせます。

クラリネットと弦楽器のピチカートによる伴奏で、曲は粛々と歩を進めるように進行します。中間部の弦楽アンサンブルの音の波から、音楽は熱を帯び、冒頭のメロディーで楽章を終えます。

3楽章 生き生きとしたスケルツォ

スケルツォとは、冗談という意味。速いテンポのおどけた曲のことです。曲を通して唯一加わるトライアングルが、曲に色彩感を与えます。

4楽章 とめどなく湧き出る情熱

まるで「運命の動機」のような主題が、管楽器によって提示されます。それは、逃れられない運命のように感じさせます。中間部で、木管楽器が代わる代わる奏でるソロ。そして続くトロンボーンのコラールは、束の間の安息を与えます。教会で吹かれたトロンボーンという楽器の特性でしょうか、そのコラールは心の琴線に触れます。

再び冒頭の主題が提示され、曲は熱を増してゆき、クライマックスへ。最後はなんともシンプル。そのままたたみこみ、感情に浸るすきを与えない最後は、やはり少し寂しく感じます。

8小節×30変奏

少しだけ専門的な話になりますが、この4楽章は「パッサカリア」という形式で書かれています。ではパッサカリアとは？それはバッハを最後に廃れてしまった形式。曲の構造はシンプルで、主題とそこから派生する30個のバリエーションから成り、8小節単位の音楽の連なりになっています。一つの主題を少しずつ変化させながら奏してゆきます。

ブラームスは、バッハの作品、カンタータ第150番「主よ、わが魂は汝を求め」の終楽章をモデルとして作曲をしました。

ヨハネス・ブラームス 交響曲第4番

みんなの4番評

親友で作曲家カルベック

当初、この曲は一般には理解されませんでした。親友でさえ、曲の発表を見合わせるよう薦めたといいます。しかし結果的に曲は評価され、多くの賞賛を集めるものとなりました。

指揮者ハンス・フォン・ビューロー

「彼の4番ホ短調は難しい。本当に難しいんだ。」

その5日後…

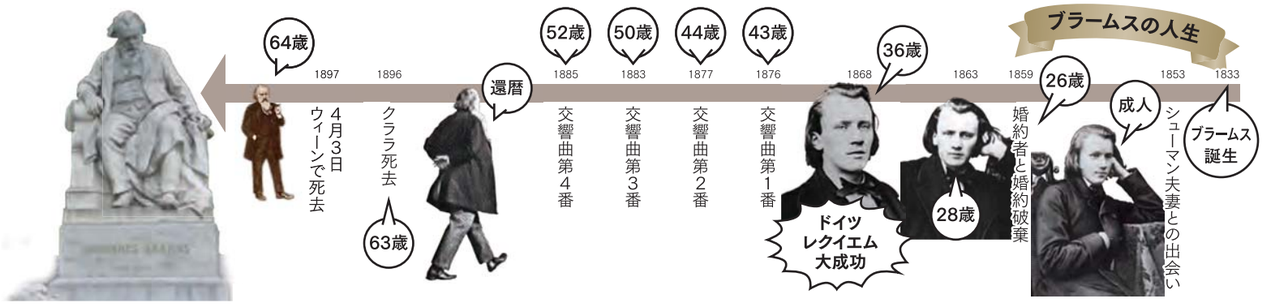
「第4番はすごい、本当にすごい、まったく独特で、まったく新しく、びくともしない個性だ。最初から最後まで、ほかに類をみないエネルギーが息づいている」

ホルン奏者・作曲家リヒャルト・シュトラウス

「ひとことで言えば、われわれの音楽芸術を豊かにする作品」

ブラームス本人

「自作で一番好きな曲」



父からの教え

ブラームスが生まれた、ハンブルクという街には、小さなオーケストラがありました。そこでコントラバス奏者を務めていたのが、父、ヨハン・ヤーコブ・ブラームスでした。とはいえ、団員はほんの数名。経済的に豊かではなく、ハンブルクの貧民街の狭いアパートで育ちました。

父は、息子ヨハネスにヴァイオリンとチェロの基礎を教え、ピアノも習わせました。父は、オーケストラの団員になることが、最高のキャリアだと考えており、彼が作曲家になることには反対でした。したがって、ブラームスは誰にも知られないように、朝早く起きて作曲をしていたのでした。しかし、音楽の素晴らしさを知る豊かな少年時代でした。

シューマン夫妻との出会い

13歳のときから酒場でピアノを演奏し、家計を助け、15歳でピアノ独奏会を開いていました。その後、ピアノの個人レッスンをしてかろうじて生計を立てていました。

そんななかで、20歳のブラームスに、作曲家シューマンに会うチャンスが訪れます。夫妻はブラームスの才能を見出し、彼が人々に認められるため大変多くの援助をしてくれました。彼はここから有名になったのです。

夫妻への感謝の気持ちから、クララはブラームスにとって生涯憧れの人となりました。

しかし、シューマンはもともと精神を病んでおり、出会いから半年もたたないうちに、ライン川へ投身自殺を図ります。その2年後、病院で亡くなった後もずっと、シューマン家の面倒を見て、クララと親密な交際を続けました。恋愛だったのか、友情だったのか、これには諸説あります。しかし、一説では、シューマンが亡くなり、憧れの対象を手に入れることが本当に可能になったときに、ブラームスは身を引いたといいます。

ヨハン・シュトラウス2世

30歳になる頃、ブラームスは初めてウィーンに滞在しました。その頃、巷ではシュトラウス一家のワルツやギャロップが流行っていました。ブラームスもヨハン・シュトラウス2世と出会うことになります。「美しく青きドナウ」と引き換えに、自分の作品をすべて譲ろうと言ったほど、彼の作品を賞賛したといいます。

ベートーヴェンの「交響曲10番」

優れた指揮者であり、ピアニストであったハンス・フォン・ビューローは、ブラームスの交響曲第1番を、ベートーヴェンの第九に次ぐ交響曲として、交響曲第10番と評しました。また、バッハ、ベートーヴェン、と並べて、ブラームスの3人の作曲家を三大Bと呼ぶ名文句をつくっています。これにより、ブラームスは決定的に歴史上の人物の仲間に入ったのです。

次回 演奏会のお知らせ

音楽のおもちゃ箱コンサート8
～楽器はおどる！～

子どものためのコンサートです

- 日時：2015年7月19日(日)
- 場所：宮前市民館大ホール
- 指揮：久世武志
- 曲目：ハチャトゥリアン／仮面舞踊会より「ワルツ」
  アンダーソン／ブルータンゴ
  オッフェンバック／天国と地獄　ほか

2015かわさき市民第九コンサート

- 日時：2015年12月20日（日）
- 場所：ミューザ川崎シンフォニーホール
- 指揮：今井治人
- 曲目：ロッシーニ／歌劇「セミラーミデ」序曲
  ベートーベン／交響曲第9番「合唱付き」

宮前フィルのホームページ

団員募集や演奏会情報など、随時更新しておりますので、ぜひご覧ください。

http://miyamae-phil.jimdo.com/

宮前フィルのフェイスブック

演奏会を作るまでの過程を、私たち宮前フィルが感じた楽しさ・苦しさ含めてお伝えしています。演奏会とともにお楽しみください。そして「いいね！」してくださったら嬉しいです。

https://www.facebook.com/miyamaephil

宮前フィルハーモニー交響楽団
◎企画・制作…大久保貴子
◎デザイン・印刷…八幡印刷株式会社